

## 2016年度 東京蜘蛛談話会例会

1. 日時 2016年12月4日(日) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒120-0022 東京都墨田区江東橋3-3-7  
JR 総武線 東京メトロ半蔵門線 錦糸町駅南口から徒歩3分
3. 連絡 当日は、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。  
加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター、OHP 等用意いたします。
5. 講演をご希望の方は、演題と使用希望機材  
(スライド、OHP、コンピュータ)  
を事務局初芝までお知らせください。

〒186-0002 東京都国立市東3-10-8 コンフィデンス高垣 105  
 有限会社エコシス 初芝伸吾  
 mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp  
 Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

- 錦糸町駅南口から徒歩3分です。



## 東京蜘蛛談話会 2016 年度採集観察会

1. 期 日： 第3回 2016年10月16日（日） 第4回 2017年2月19日（日）
2. 場 所： 東京都町田市 芹ヶ谷公園
3. 集 合： 集合 10:00  
小田急線町田駅西口の正面 「特急券うりば」前  
芹ヶ谷公園は町田駅から徒歩 10 分  
(町田駅を北上し町田街道 47 号線を越える)
4. 世話人： 池田博明  
携帯電話：090-9670-1525  
芹ヶ谷公園西口から入り，管理事務所付近で昼休み。  
その後，国際版画美術館方面へ東口まで。

## 秋山あゆ子さん「二十四節気 虫のお話」三部作の紹介

萩野 康 則

童話・絵本作家のおのりえんさんが文を書かれ，当談話会会員で，漫画家・絵本作家の秋山あゆ子さんが挿絵を描かれた「二十四節気 虫のお話」シリーズが3冊，2013年から2015年にかけて相次いで刊行されたので紹介させていただく。なお，便宜的に，3冊を発行順にそれぞれ，1巻，2巻，3巻とする。本シリーズには土壌動物も多数登場するので，日本土壌動物学会の事務局通信紙「どろのむし通信」でも紹介する予定であり（投稿中），本稿の記述はそれとかなり重複していることをお断りしておく。

おのりえん（作）・秋山あゆ子（絵）「虫のいどころ 人のいどころ」

B6判/276pp. 理論社 2013年3月発行 ISBN978-4-652-20011-7 本体 1,500円

おのりえん（作）・秋山あゆ子（絵）「虫のお知らせ」

B6判/302pp. 理論社 2014年6月発行 ISBN978-4-652-20057-5 本体 1,600円

おのりえん（作）・秋山あゆ子（絵）「虫愛づる姫もどき」

B6判/279pp. 理論社 2015年1月発行 ISBN978-4-652-20084-1 本体 1,500円

主人公の「よりさん」は夫の転勤にともない，男ばかりの4人の子とともに東京から九州北部の団地に引っ越してきた専業主婦である。ムシが大の苦手だが，自然の多い土地であるため東京時代とは比べものにならないくらい，頻繁にムシと遭遇するようになった。ある日団地の中庭で，古株主婦の「すーさま」と話していたところに派手な毛虫が現れたが，すーさまは当たり前のよ

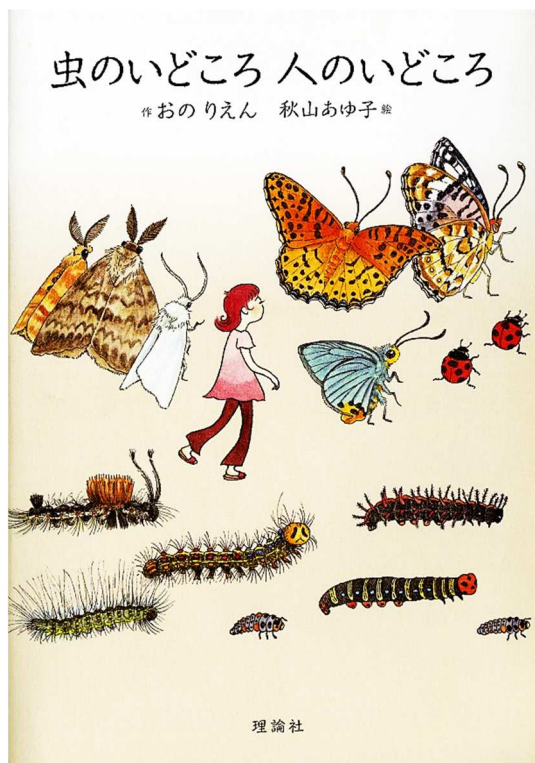
うにそれを踏みつぶした。その行動に驚いたよりさんは、その毛虫が何であるかをすーさまに尋ねるが、「毒虫」という答えしか返ってこず、らちが明かない。毛虫の正体を詮索するよりさんを見て、事もあろうにすーさまは、よりさんが「虫好き」とであると決めつけてしまう。よりさんは、虫嫌いではあるものの、持ち前の探究心から毛虫の正体を知りたくて自宅に持ち帰って図鑑で調べ、ツマグロヒョウモンの幼虫であることをつきとめ、そして飼育を始める。すーさまの宣伝により「よりさん＝虫好き」の評判を知った近所の人たちが、色々なムシを持ち込むようになり、さらには家族での花見や地域行事、買い物などの日常の外歩きの際にもさまざまなムシとの出会いがある。このようなムシとのつきあいを、4人の息子たちや夫、地域の人たちや親

せき知人と絡めながら二十四節気それぞれの章立てで、季節を追って綴ったのが本シリーズである。1巻では啓蟄（3月5日）から小満（5月20日）まで、2巻は芒種（6月5日）から白露（9月7日）まで、3巻は秋分（9月22日）から雨水（2月18日）までを取り上げている（括弧内は2016～17年の日付け）。

本作品には随所に正体不明の超自然的存在である「小さいものたち」が現れる。幼少時によりさんのそばに時折やってきていっしょに遊んだ、他人には見えない「小さいものたち」がまた現れるようになったのだ。きびしん、せからし、うぞうむぞう、ブラボー、ハラショー…。大きさも姿かたちも匂いも違う、たくさんの「小さいものたち」が代わる代わる現れてはよりさんを取り巻き、「一緒に遊ぼう」と誘う。この「小さいものたち」の存在が、本シリーズを幻想的な、ちょっとおどろおどろしい独特なものにしている。2巻の帯の惹句に「怪しく幽きファンタジー」とあるのは、正に言い得て妙である。

この幻想的なストーリーに絶妙なアクセントを加えているのが、秋山あゆ子さんの精巧緻密なムシたちの絵である。カバーの彩色画はもちろんのこと、本文挿画のすみ1色の画も素晴らしいの一言につきる。登場するムシたちのうち、クモは3巻にアシダカグモが、九州地方の呼び名である「コブ」として出てくるだけだが、重要な役割を果たしている。

文を書かれたおのりえん(小野 里宴)さんは、大学と大学院修士課程で心理学を専攻された後、教育相談所の心理相談員となってハンディのある子どもたちに接するかたわら、創作を始められた方である。ご自身が男の子4人！の母親であり、夫の仕事のために佐賀県で暮らしていた時期





もあり、この家庭環境が本三部作のベースになっている。私が知り得た限りでは雑誌「母の友」（福音館書店）1988年6月号に掲載された「かっぱうたろう」がデビュー作と思われる。文だけでなく絵もお上手な方で、「こちらどうぶつほいくえん」（年少版こどものとも 1993年1月号、福音館書店）や「ママあそんで」シリーズ3冊（偕成社、1995年）など、創作初期には文と絵の両方を手がけた作品もある。絵本作品に、欧米の作品と見まごうような「おかしきさんちのものがたり」シリーズ4冊（はたこうしろう/絵、フレーベル館、2007～11年）や「おしゃれなかばのヒッポ・ヒッポ・ルー」（国松エリカ/絵、偕成社、1998年）など、読み物作品に、長崎県のわらべ唄で始まる「でんでら竜がでてきたよ」（伊藤英一/絵、理論社、1995年）

や、ハリネズミが主人公の「イガー・カ・イジー物語」シリーズ4冊（久本直子/絵、理論社、2003～05年）などがある。また長編ファンタジー作品として「メメント・モーリ」（平出衛/絵、理論社、2001年）がある。

2016年4月13日～5月8日に東京都大田区千鳥にある絵本店「TEAL GREEN in Seed Village」で、この三部作の原画展があったので、5月5日に出かけてみた。実は以前にも他所で原画展が開催されていたのだが、その際には会期が終わってからその情報を知り、大変悔しい思いをしたのである。会場の絵本店は、静かな住宅街にある小さなお店で、手前の絵本コーナーと奥の12席のティールームが中庭を望む廊下で連結した造りになっていて、原画展はティールームで行われていた。正確な点数は数え忘れたが、20点ほどであったろうか、三部作中で見覚えのある絵の原画を間近に見ることができた。総じてサイズが思っていたよりもかなり小さかったのが意外であった。もっと大きく描いて縮小するのかと思っていたのだが。また、ホワイトによる修正が、私が気づいた限りでは2箇所のみと、ほぼ皆無であったのにも驚いた。あれだけの細密な絵をノーマスで仕上げることは、並大抵の集中力ではできないはずで、これら作品群にかけた秋山さんの意気込みと気力充実ぶりが伝わってくるようだった。またもう一つ驚いたのは、細い白抜きの線が、白絵の具によるハイライトではなく、周囲をスミで塗りつぶして描かれていることである。蛾の触角をそのように仕上げているのも素晴らしいが、もっとすごいのはキリギリス類の細くて長い触角も、同じように描かれている点である。会場には秋山さんの原画のほか、おのさん手作りのフェルトの人形やパペットも置かれていて、暖かい雰囲気を醸し出していた。美味しいコー



ヒーを飲みながら原画を堪能した後は、絵本コーナーをしばし物色。福音館書店の児童向け月刊誌のバックナンバーが充実していたので、気になった1冊を購入する。その折りにとても穏やかで優しい雰囲気の女性店主とお話をしたところ、秋山さんの絵によるハエトリグモの作品が、「かがくのとも」2016年8月号で発行される予定であることは既にご存知であった。さすが商売柄である。

最後に、秋山さんの既刊の漫画作品集が、文庫本として再刊行されたので、簡単に紹介したい。

秋山あゆ子(著) ちくま文庫「虫けら様」  
文庫判/206pp. 筑摩書房 2015年9月  
発行 ISBN978-4-480-43292-6 本体  
760円

オリジナルは2002年に青林工藝舎から出版された同名の単行本(ただし著者は秋山亜由子名義)で、往年のアングラ漫画誌である「月刊ガロ」(青林堂)や、その後継誌である「マンガの鬼 AX アックス」(青林工藝舎)に掲載された秋山さん初期の漫画作品15編と単ページの画文「虫けら帖」2本に、書き下ろし漫画1編が加えられている。この作者の最近の絵本作品は、リズムカルでユーモラスな、明るいストーリーになっているが、漫画は幻想的で少し不気味な、狐につままれたような内容のものが多い。クモは「稲虫」にコモリグモが、「虫けら様(四)」にハエトリグモが、「くものはなし」ではとびらに各種クモ21種が描かれ、本編にはジョロウグモとイソウロウグモが登場し、さらに末尾の「虫けら帖②」ではクモの各種捕食方法が紹介されている。また「土蜘蛛草紙」はそのものズバリであるし、「雪迎え」は冒頭で座敷鷹のハエトリグモが、後半でゴッサマーの各種クモが登場する。

文庫化に際しては、クモやダニも取り上げられている「ときめき昆虫学」(イースト・プレス、2014年)の著者であり、人気ブロガーでもあるメレ山メレ子さんの解説がつけられている。

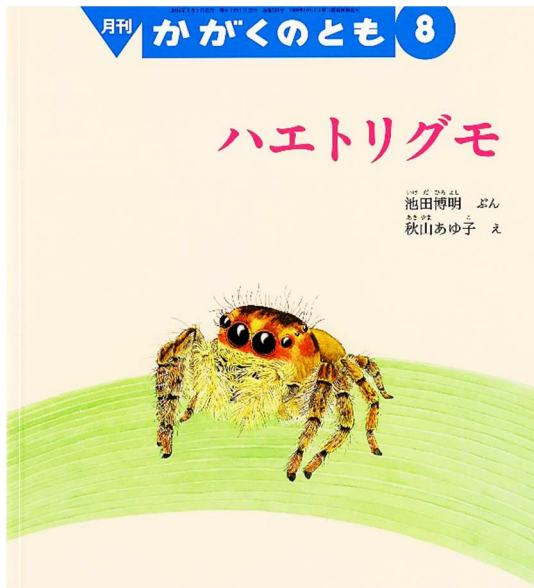
秋山さんならではの漫画をたくさん、文庫サイズで楽しめるようになったのは大変有り難い。ただし、小サイズゆえ文字の読むのは老眼の目にはしんどいし、画も小さくなっていてオリジナルの味わいを損ねている。単行本版もまだ新刊として入手できるので、小さい字が見えづらくなって来たような方(私も!)にはそちらをお奨めする。



## クモが出てくる子どもの本情報(14) 2016年に出版された雑誌1点の紹介

萩野康則

いずれも当談話会会員の池田博明さんと秋山あゆ子さんによる、ハエトリグモを取り扱った作品が、福音館書店発行の児童向け月刊科学雑誌に掲載されたので、今回はそちらを紹介させていただきます。



池田 博明 (文)・秋山 あゆ子 (絵) 「ハエトリグモ」 かがくのとも 2016年8月号  
25×23cm/28pp. 福音館書店 雑誌コード 02377 本体 389円

現在日本のハエトリグモ研究の第一人者である池田さんと、「虫めづる姫君」の異名を持つ漫画家・絵本作家の秋山さんの共著で、「かがくのとも」2016年8月号にハエトリグモを扱った作品が掲載される、という情報を得たのは今年4月24日の談話会例会の際であった。それ以来、どのような作品になるのかとても気になり、発売日の7月2日を心待ちにしていた。

私が発売を心待ちにしたのは、大いに気になる点が2つあったからである。

1つは池田さんがハエトリグモを題材にしてどのようなストーリーを組み立てるか、である。池田さんは同じ福音館書店の児童向け月刊誌「たくさんのふしぎ」2015年3月号に、絵の荒川暢さんとの共著で「クモと糸」という作品を発表されている。これはおもに身近に見られるクモ種を取り上げて、地中性、徘徊性、造網性それぞれのクモがどのように糸を利用しているかを紹介した好著である。クモ類全般を扱った前作に対し、ハエトリグモ限定の今度の作品がどのようなものになるのか、とても気になったのである。

もう1つは秋山さんがどのような絵を描かれるか、である。秋山さんは往年のコアな漫画雑誌「月刊ガロ」1992年12月号(青林堂)でデビューして以来、一貫してムシを題材にした漫画を描かれてきた。その後絵本も手がけられるようになり、クモやミツバチを主人公とした作品を発表されている。秋山さんの絵は実に写実的で、種レベルの同定も可能なほど極めて正確であるが、これまでの作品では着物を着ていたり眼に瞳があったりと、少なからず擬人化されている部分があった。今回は科学雑誌の絵であり、もし全編擬人化なしで絵を描かれるとすれば、私の知る限り初めてということになるのだ。

そのように待っていたところ、期せずして6月22日に池田さんが完成した雑誌を送ってくださり、発売の10日も前に作品を拝見できるという、幸運に恵まれた。届いた雑誌のページを繰り、最初のページを開いたところで、思わずニンマリしてしまった。台所のテーブルの上にはこけしの楊枝入れがあり、周りの陶器の柄も蝶やトンボで、いきなり秋山あゆ子ワールド全開だったからである。最後まで見てもついに擬人化は無かった。従来の漫画家～物語絵本作家から科学絵本の画家という新境地を開かれたという意味で、秋山さんにとってマイルストーン的な作品になったのではないだろうか。ただし科学絵本とは言え、たんすの金具が蝶の形になっていたり、子グモが越冬用の巣からこちらを見ていたり、秋山さんらしい茶目っ気たっぷり、嬉しくなってしまう。

ストーリーは台所でアダソンハエトリを発見するところから、ハエトリグモ一般の習性→屋内性種の紹介→野外性種の紹介→ネコハエトリの縄張り争い→ネコハエトリの一生と、実にオーソドックスで分かりやすい。一見何でも無い筋書きだが、ここまでたどり着くには並々ならぬご苦労があったことと推察する。文章も平易で量も多すぎず、本誌が読者対象としている5～6歳児にも十分理解できるものになっていると思う。

ところでごく最近、「世にも美しい瞳 ハエトリグモ」という本が出版された(須黒達巳/著、ナツメ社、2016年、本体1,300円)。新進気鋭のハエトリグモ研究者による肩の凝らない解説書で、中心となるのは、素晴らしいハエトリグモの接写写真、それも(タイトルからわかる通り)眼域を正面からとらえた愛らしいアングルのものが大部分である。また須黒さんは、文一総合出版の人気シリーズである「ハンドブック」シリーズでも、ハエトリグモ編を出版する予定であると聞いている。なおご本人のウェブサイト「ハエトリひろば」<<http://www.haetorihiroba.com>>にも、ハエトリグモ類の見事な画像が多数掲載されている。まだご覧になっていない方は、ぜひ一度訪ねていただきたい。

これらの出版物や、NHKの「ダーウィンが来た！」でクジャクグモという美しいハエトリグモが取り上げられたことにより、ハエトリグモが世間に広く知られるようにならないかと、密かに期待している。かつては極めてマイナーだったクマムシという動物群が、ネットや放送、出版等で取り上げられたため、現在ではかなりメジャーな存在になっているように。



## 新刊紹介



CD 日本のクモ Ver.2016

新海 明・谷川明男・安藤昭久・池田博明・桑田  
隆生 著者自刊 送料とも 2140 円

(申し込み：dp7a-tnkw@j.asahinet.or.jp 谷川  
まで)

## ジョロウグモ

加藤 康子

雨が降っていた。寺へ向かう道筋から、赤ん坊を背負った女の人と、六才ぐらいの女の子が歩いてくる。傘の中で、女の子は母親の服の端をにぎりしめ、その早い歩調に引かれるように、せわしなく足を動かしながら、顔をあげてしきりに何かを話していた。

降り頻る雨の発散する。うっとうしい肌寒さから逃れようともいうのだろうか、母親は眉をしかめ、唇を引き結んで肩をいからせて歩いてゆく。傘からしたたる雨に濡れて、手の先の膨らんだ手提げ袋が、むっつりと揺れていた。息を弾ませた女の子は、母親からの返答が無いことに気後れするふうもない。日頃から慣れていることなのだろうか。

何を話しているのだろうか。背中に負われた赤ん坊の足が、母親の腰のあたりで跳びはね柔らかな色をした小さな指が、のびたり、ちぢんだりしている。

雨の音と、女の子の声、母親の胸元にくいこむ背負いひも、それに古びた手提げ袋。

こういったものたちを、ずっと以前にどこかで見たことがある。

昔に見た映画の一場面だったのだろうか、それとも、自分が現実に体験したことなのか、おぼろげな記憶ではあるが、見慣れた絵本を眺めるように、びたりと心に馴染んでくる情景だった。

二人をみつめているうちに、その思いに寄り添うように、ふいに湧いてきた懐かしさ。口の奥からじむ甘酸っぱさに呼びさまされて、記憶のパズルがひとつひとつつながっていく。時の流れを一気にさかのぼり、女の子は幼い日の私となって甦ってきた。

そこに見えてくるものは・・・・・・



降り頻る雨の中、弟を背負った母が、私の手を引き、どこかへ向かってひたすら歩き続けている。話しかけても答えは無く。傘から落ちる水滴に首をすくめて、夕闇迫る石ころだらけの坂道を歩きながら、幼い私は寒くてせつなく、寂しかった。子供心にも感じられる寄るべない思い。ただにぎりしめた母の手のぬくもりだけが救いだった。

戦後の苦難の時代、多くの人々が貧しさの渦の中から未だ飛び立てない日々を送っていた。生活に追われるばかりで、笑顔や思いやりを忘れずに子供たちに接することができた人がどれほどいただろう。

~~~~~

「こんにちは、雨の中、おでかけ大変ですね」

考えるより先に言葉のほう飛び出していた。私は、母親の足を止めたかっただけだ。女の子が甲高い声で話し続けている言葉を、母親が一時でも立ち止まって聞けるようにと、ついお節介をした。

母親はギョッとした顔で私のほうを見たが、すぐに怪しむような一瞥を目に浮かべて通り過ぎて行った。それにしても私が声をかけたときの彼女の印象はとても強かった。たじろいだけでなく、反感めいたものがその一瞥の中に感じられた。何かの考えに集中していたところに私が声をかけたので嫌だったのか、なんとも気まずい。口ごもりながら振り返ると、心持ちゆるやかになった歩調で、二人が角を曲がってゆくところが見えた。

~~~~~

雨は小止みになってきた。

紅葉の木々にふちどられた鈍色の空が仄明るく内側から光り出すところに寺の門に着いた。境内には人影も無く、御堂の中に素朴な木彫りの仏様がおられた。長い年月に洗われ、何やら叡智ある表情をして、人々の妄念をやさしく拭い取ってくださるのだろうか。寺全体は古びてはいるが廃ってはいない。時代の骨組みを伝えて、どっしりとした大きさを感じさせる。

薄い光線が射す大木の根元に水溜りがあった。見ていると、まるで老女の笑いのような泡が、ひそひそとできては、つう——と流れて消える。雨は止んでいたが、大木の幹を伝わり落ちる水が泡をつくっているのだった。

濡れた草の発酵するかすかな匂い。手指の先に冷えた風の行方を感じる。自然のいとなみは秋から冬へとひとすじに落ちてゆくのだろうか。このどっちつかずの微妙な時期が私は好きだ。もうしばらく続いて欲しいと思っている。

境内の木に、複雑にいくつもの網が組み合わされたジョロウグモの網があった。成熟の真近と思われる雌がいる。黙々として風雨に耐え、網の中心に長くしなやかな八本の足でふわりとつかまっている彼女の、ピロードの光を放つ艶やかな姿態。

「もう、いいかい」

「まあだだよ」

身体の小さな雄は網のはずれにいて、彼女が最後の脱皮をして完全な女になるときを待っている。

る。雌は夏の頃のつづれ織りのような模様が変化して、腹部が柔らかく膨らみ、黄色と灰青色の滲むような縞の中に、紅色の奔放な模様がさしこんでいる、おしりにある異様な迷路の黒い色、一度見たら忘れられない色彩は美しくなまめかしいものだった。クモの世界は雌の美が際立っているとと思う。

人の話し声が入り、数人の参拝客がやってきた。飽きることなく喋り続ける陽気な人達を眺めながら、私は明日からのことを考えていた。明日とは今日の次の日、確かな現実の時間は流れ続けている。誰もがするように、明日を迎え入れて過ぎてゆけば、一日は過ぎてゆくだろう。変化を受け取る能力さえあれば、私は見慣れた日常に少し濃淡を加えて、自分らしく生きていくことができる。そんな思いが頭の中を通り過ぎていった。

~~~~~

寺を出て駅へ向かった。きじの声がする。午後の駅はゆったりとして、雨上がりの日差しに浮かぶように横たわっていた。階段の下からのぼってくる風をやり過ぎてホームに下りた。乗客は数人だけで、うねうねとした時のめぐりに寄りかかって眠っている。

発車直前のアナウンスに混じって、誰かと挨拶を交わす声が入る。乗降口を見ていると小太りですつと光る頬をした中年の女性が乗り込んできた。彼女の服装を見ると、思わず息をのんだ。赤いフェルトの帽子に桃色のセーター、黄色のスカートと、黒いストッキング、その先に白い運動靴をはいている。

「いや、はや」何と表現すればいいだろう。一瞬は唇が歪みそうになった。しかし、すぐに気持ちは変わった。この道化じみた服装の主張する屈託の無い可能性というものはどうだろう。単に派手というのではない。

まわりのざわめきを撫でて、さっと払い取ってゆくような迫力。私はさっき寺の境内で観てきたジョロウグモを思い出していた。とっぴな格好だからと、調和がとれていないからと否定はしない。意図的に探さなくても色彩の偶然の出会いが、賞賛の表現を生み出すことはよくあることだ。もしもシュールリアリストが見たら「まるで花束のようだ」と言うかも知れない。

よく見れば、彼女のピカピカと光る血色の良い頬には、この服装が妙に似合っているような気になってくる。

~~~~~

「まあまあおそろいで、どこにおでかけですか」彼女は三人連れの老女達に話しかけた。

それは「再び」の驚きだった。笛の音に似たヒュルヒュルと滑らかで抑揚のついた平仮名文字の話しかたで、その丸みのある赤い唇から、ゆらゆらと出てくる声は、言葉というよりも予測のつかない動きをする音符のようだった。

それまで辛辣な薄笑いで彼女を眺めていた若い男が、肩を揺らして椅子からずり落ちた。

車内の空気がゆるりと甘くなってくる。

「ちょっとお寺さんまでねえ」

老女達はにぎやかに答えた。彼女は愛想よく次々と話題を変えて活発に話し続ける。笛の音は

ヒュルヒュルと人の肩をすり抜け、漂い、綿毛となって鼻をくすぐり、ほの温かい体温となって肌に触れてくる。

人の声の持つ不思議さ、その心地良さに驚き、私はゆるやかに気持ちが展げていくのを感じて、すっかり彼女に魅了されてしまった。しかし、世の中には多種多様な感受性の持ち主がいるので、私のように簡単ではない人もあったらしい。ぐるっと見回したところ、気づかわしげな眼に、呆れかえって放心状態の顎、皮肉な唇と吊り上がった眉、ヒクヒクとふくらむ鼻などがあった。

~~~~~

いつのまにか眠っていたようで、ハッと眼が覚めたら私の住む町に着いていた。プラットホームに降り立つと、空気は身震いするほどに寒く、駆け足で駅を後にした。振り返って見ると、暗闇に落ちてゆく駅舎の屋根と対称的に輝きを放つプラットホーム、電車の窓には人々の談笑する影が動いて、やがて電車は発車し、その先はこぼれるように轟音と共に流れ去ってゆく。

そして、一瞬の闇が訪れた。闇は余韻を残し、その暗さの内に立っていると、私は自分が本当にひとりぼっちになっていると実感した。すると、これまであれこれ言い訳しながらやり過ぎて、置き去りにしてきた不安定な心が、すっと見えてくる。

年令のせいかもしれないが、夕闇の中でふいに心をつかえるこの不安感は、“時は貴重であり、それは思いの外短いのではないだろうか、”という焦りから来ている。どんな道であっても、一日歩いて進んだら、昨日よりも別のところにいるということ。ひとつのことは終わり次のことが自分の前に訪づれていると気づかなければと、あらためて思う。

今日一日は、とりとめもなく過ぎていった。けれどもいろんな場面に出会った一日でもあった。私の目や耳、五感のすべてが楽しんだ。ゆっくりと観ることのできた美しいジョロウグモと、ジョロウグモの化身のようだった女性の姿を思い出す。

入退会は：事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8  
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス  
E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

KISHIDAIA 原稿投稿先：池田博明 〒258-0018 足柄上郡大井町金手 1099  
E-mail : fwg9084@mb.infoweb.ne.jp  
キシダイアの原稿締め切りは、6月末日と12月末日です。

通信原稿投稿先：谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416  
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp  
通信の原稿締め切りは、4月末まで、8月末、12月末です。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円、学生 2000 円です。  
郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。  
会費のことは：会計担当 須黒達巳  
〒240-0026 横浜市保土ヶ谷区権太坂 1-39-6  
TEL : 080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com



~~~~~

駅から離れるにしたがって闇は遠退き、仄かな光が白い道を浮かびあがらせた。路上を這ってくる野焼きの夕残りの薄い煙，どこかの家の雨戸が引かれる音，子供達の笑う声が聞こえる。

空には昇ったばかりの月が，古風な金糸刺繍のように光っていた。私は長く静かな呼吸をし，足音も立てずに歩いた。身内に湧いてくる安らかな思いをそのままにして。

